

明治維新の戦火から社寺を救った

板垣退助の銅像を復元

明治維新の際、戊辰の役の戦火から日光の社寺を守った板垣退助の銅像復元と、神仏分離から社寺を守った落合源七、巴快寛の顕彰碑の建設が、十二月九日に開かれた建設実行委員会で本ぎまりになり、落合源七、巴快寛の顕彰碑は公会堂前に建てられ十二月二十一日除幕式が行なわれました。

銅像復元4月を目途に

彫刻家 新関氏に依頼

板垣退助は明治戊辰の戦いのとき官軍の将として攻めてきましたが、日光が兵火にかかることを惜しみ日光町民と協力して日光にこもっていた徳川方の軍を奥羽地方へ引き上げさせ日光を戦火から救ってくれた故郷に銅像を建ててもらいました。深慮を凝らした銅像は町民はじめ観光客に親しまれていました。

ところが、今次大戦のあり（昭和一九年）金属回収の目的から国家献納に応じ、その後、復元されぬまま台座だけが残って現

落合源七・巴快寛の顕彰碑

12月21日盛大に除幕式

落合源七 巴快寛は町民の代表として社寺殿堂を神仏分離の危機から守った故人で、板垣退助の銅像復元とともに顕彰碑の建設をすすめてきました。このほど完成し十二月二十一日、関係者が多数列席して除幕式が盛大に行なわれました。

別掲の碑文でもわかるとおり両氏は日光が「日光の互解」といわれる時にあったおりの神、神仏分離令が出され、神は神、仏は仏と、それぞれ建物を分離されることになったわけ。

しかし、当時は神社側、寺側としてこれを実施するにも、いろいろな事情からひじょうな困難にうちひしがれていたのです。この時、全町民に呼びかけ建物分離反対運動の先頭に立って社寺保全のために尽力され、その結果、社寺は難をのがれることができたのですが、こうした故郷の遺徳をしのび顕彰碑を建立し後世に伝えようというのでそれが実現したものです。

なお、顕彰碑は二社一寺、市などからの寄付金約一〇〇万円

在に至っているのですが、昭和三八年九月、その遺徳をしのび銅像を復元しようと復元建設委員会がつくられ、具体的にすすめてきた結果、このほど建設が本ぎまりとなったものです。

もとの銅像の製作者、故本山白雲氏の原型をもととして復元されますが、原型拡大製作作業は彫刻家の新関氏に依頼し、来春四月の除幕を目途に製作にとりかかっています。新関氏は輪王寺入口に建立してある勝道上人像の製作者で第一美術展審査員などの要職にある方です。

で建立され、石碑は稲荷川上流の山林から搬出し、碑文を刻みこんだものです。題字は名誉市民の菅原栄海氏がお書きになり、撰文はやはり名誉市民の故星野理一郎氏がなされています。高さ三メートル、横一メートル、厚さセンチで、台座をメートル入ると高さがにもなる立派な石碑です。



公会堂前の緑地帯に建立された顕彰碑

碑文
明治元年王政一新とともに、全国の社寺に神仏分離令が布告され四年一月日光の指令によって、日光山は往古の形態を解き、二荒山神社、東照宮、輪王寺に分離したが、神社境内から堂塔を移転することについて、困難な問題が生じた。時に山麓の町民は、これらの堂塔移転が行なわれるならば、世に知られた殿堂の景観を損い、そのために名勝日光が荒廃することを憂えて、落合源七、巴快寛両名を代表に運び、万難を排して堂塔の据置き保存を関係筋に陳情した。九年六月、明治天皇の東北御巡幸に際して両名は随従の頭官に前記の事情を敷明し、目的達成のために、身を命を賭して尽力した。たまたま解体された三仏堂は、観音の見聞するところとなつてその保存が唱道された。やがて山内の荒廃を御上覧、旧観を失わざる様との聖旨が伝えられ、同年八月特旨をもってお手元金三千円御下賜の恩命に浴した。かくて三仏堂を再建しその他の堂塔は据置きとなり、日光の美観は保持されて今日に及び、日光山の比類のない建築美を誇っている。ここに明治維新に際して、社寺殿堂の保存維持を請願し、百年の大計をはかった日光町民の熱誠を銘記し、その代表として尽力した落合、巴、両氏の名を特筆し、これを称えて永世に伝える。

スキー教室

ヨーロッパ女子プロコチを囲み

1月22日（日）

霧降高原スキー場で

1月22日（日）市営霧降高原スキー場でスキー教室を開設します。

オーストリアの女子プロコチ、ミスブリッターさんを囲み技術的な講習会が行なわれます。ふるって参加してください。参加費は無料です。なお、貸スキー、貸靴、その他ロッジ（食堂）などの施設が完備してありますので、ご家族づれでどうぞおいでください。